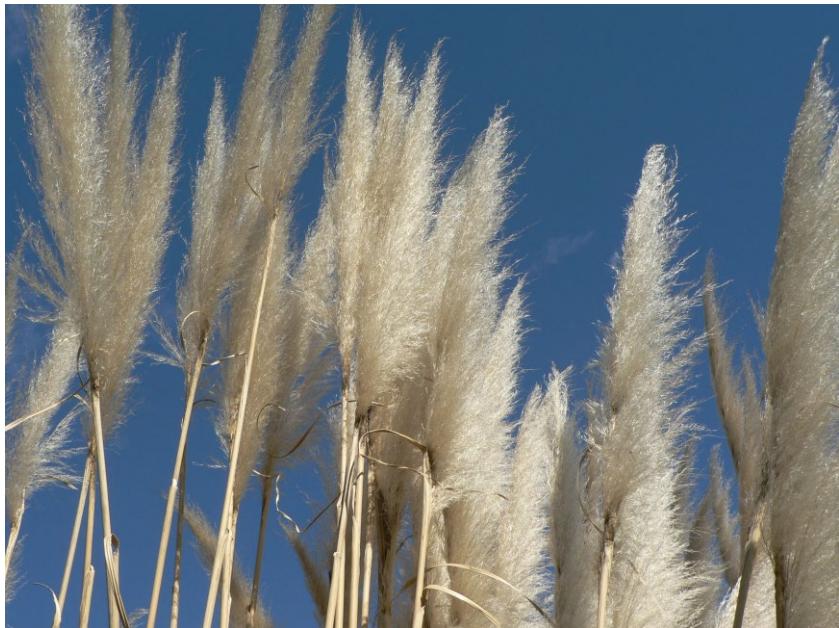


白金誌

十月号



平成25年10月発行 第32号

白金葭定例句会案内

月例句会報(13/10/18 7名欠1 御命講、落花生) 飯田孝三

十一月十五日(金) 12:00~15:00(アビスター第一和室)

12:00~15:00

兼題:立冬、朴落葉
兼題:立冬、朴落葉

善男善女念珠念々御命講
角川文庫ピーナツ囁みながら

落花生食たゞべ肌よき嫁御寮

小津安二郎この町に生る秋茜

案山子コンクール囁せり昼鴉

十一月29日(金) 10:30~13:00 千駄木駅待合せ、鷺外記念館界隈
吟行句会場(アカデミー向丘)
十二月二十日(金) 12:00~15:00(アビスター第四学習室)
12:00~15:00(アビスター第三学習室)

13:00~17:00

兼題:葱、湯たんぽ

一月十七日(金)

12:00~15:00

(アビスター第三学習室)

兼題:葱、湯たんぽ
兼題:新年一般

立冬、朴落葉の参考句(十一月十五日分)

あやとりの橋を渡つて冬に入る

コンビニのおでんの湯気や冬に入る

冬来れば大根を煮るたのしさあり

地を吹く風さらさら庭に冬が来る

家じゅうの鏡垂直冬に入る

立冬や鉄路の継目ごとに音

齡のみ自己新記録冬に入る

落葉落葉落葉の中の朴落葉

朴落葉始まつてゐる標高差

朴落葉がさり音立つ夜の静寂

三戒の旅の終えたる朴落葉

たましいを思い朴の葉拾い持つ

八街や黝々と干す落花生

日蓮忌清澄山に蛭もゐて

ベンキ工吊すロープや秋黴雨

病院の待ち時間など白き秋

美しき刺虫いらむし散れる道行けり

増田陽一

光成高志

名久井清流

齊藤美規

嶋田シゲ

西河しん平

和知喜八

三橋敏雄

星水彥

花谷清

逆様に干さるる条の落花生
落花生ぼつちの黒さ筑波晴れ
潮風の堂に吹き込む日蓮忌

お会式の読経の木魚リズム取る

万灯練供養団扇太鼓を打ちまくる

光 みち

手をつなぐたちね在りし会式かな

浅野正美

泥付きの一株貴ふ落花生

幟立つ新落花生発売日

豆好きの親子三代落花生

万燈待つ西日の照らす顔と顔

御会式の夜や上弦の月明り

吉羽多美子

落花生干して竈の火伏札

亡き父の大きな胡座栗の飯

木犀の香りの中に傘を干す

お会式の団扇太鼓に子の怯へ

秋暑し駅のあちこち鳩の糞

青木啓泰

落花生おしゃべりつきず殻の山
御命講万灯集まる本門寺
ローカル線りんご烟の中を行く
信濃路や名物ソバに舌づみ
粂殻焼く烟のあちこち煙たつ

松村幸一

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

3 3 3 八街や黝々と干す落花生

3 3 3 落花生干して竈の火伏札

3 3 3 潮風の堂に吹き込む日蓮忌

3 3 3 落花生干してあるなり妓樓跡

万灯ののちの闇濃く北小金

絶ちし酒会宵は解かむ会式かな

落花生ソーニヤ恋しと貢追ひ

これからは夜毎月濃き会式かな

陽一
多美子
高志
啓泰

孝三 高志 幸一 孝三 高志 多美子 高志 啓泰 孝三 多美子 幸一 高志 みち 幸一 陽一 陽一 啓泰 高志 陽一 陽一

1 泥付きの一株貰ふ落花生
飲み友の蛙のような太い喉
落花生おしゃべりつきず殻の山
御命講万灯集まる本門寺
懾立つ新落花生発売日

亡き父の大きな胡座栗の飯
焼酎や自分のものは自分で作る
焼酎や自分で作る自分のもの
べキ工吊すロープや秋黴雨
落花生食たらべ肌よき嫁御寮
ローカル線りんご畑の中を行く
豆好きの親子三代落花生
手をつなぐたらちね在りし会式
案山子コンクール囃せり昼鴉
粋殻焼く畑のあちこち煙たつ
作者とすぐ同化できる。藤村の

ローカル線りんご畑の中を行く

作者はローカル線に乗つて廿宿に行つてゐるのでしよう。こ
つと読み、すつと飛ばしてしま
読んでみると、ローカル線に垂
作者とすぐ同化できる。藤村の

一句鑑賞

一句鑑賞

1 泥付きの一株貰ふ落花生
飲み友の蛙のような太い喉
落花生おしゃべりつきず殻の山
御命講万灯集まる本門寺
幟立つ新落花生発売日

亡き父の大きな胡座栗の飯
焼酎や自分のものは自分で作る
焼酎や自分で作る自分のもの
ペ、キ工吊すロープや秋黴雨
落花生食たゞ肌よき嫁御寮
ローカル線りんご畑の中を行く
豆好きの親子三代落花生
手をつなぐたらちね在りし会式かな
案山子コンクール囃せり昼鴉
粋殻焼く畑のあちこち煙たつ

一句鑑賞

ローカル線りんご畑の中を行く
作者はローカル線に乗つて林檎の宿に行つてゐるのでしよう。こういふと読み、すつと飛ばしてしまう。読んでみると、ローカル線に乗つてゐるのだと、作者とすぐ同化できる。藤村の初歩

みち
多美子
みち
啓泰
正美
啓泰
みち
陽一
孝三
正美
みち
幸一
孝三
正美
正美
も浮んでく
を見ていく
日置いて、
句会ではさ
見ながら湯
光成高志
正美

る。強い句、弱い句などという言葉を聞いた覚えがあるが、印象の強弱で選をするのは選句の一法に過ぎない。

八街や黝々と干す落花生

陽一

八街やちまちは佐倉と東金の中間地にある落花生の名産地である。落花生は花が咲いた後、柄が伸びて地面に落ちて実が生る。それが大きくなつて莢ができる中に新しい実ができる。この実は、傷みやすく黴も出やすいので、株を抜いたら逆様にしてすぐ干す。その後、藁塚ならぬ、落花生塚を作つて乾燥させる。土のついた株を表に出して野積みにするので、黒々とした塚となる。これはぼつちと呼ばれる。頭にとんがり帽子のような、藁の屋根をかけたぼつちが畑に並ぶと、色の対比も出て美しい。

「黝々と干す落花生」はその様を描写したもので、煤のような黒ではなく、薄黒の「黝」を使ってより写実的になつてゐる。美術家の陽一さんならではの表現である。

日蓮忌清澄山に蛭もゐて

陽一

十月十三日は日蓮が池上で没した日である。池上本門寺では、その三日前から盛大に日蓮忌を修する。特に中日の十二日夜の万灯練行列は、驚くばかりに元気のいい練供養である。掲句は、池上ではなく、日蓮誕生地小湊近くの「清澄山に蛭もゐて」と日蓮忌を取り合わせられた句である。日蓮の修業から遊学を経て立教開宗をされた清澄山は日蓮の故郷である。立証安國論から國を諫め

る論を三回なされ、佐渡へも流罪になつたりした日蓮の生涯は、蒙古襲来もあつた日本の国難の時代と重なる。人間に一番嫌われ怖い吸血虫の山蛭もある清澄山を登つた作者は、その道を登つて修行した日蓮に思いを馳せたのである。「蛭も」のものも象徴的である。

(13. 10. 20)

一句鑑賞

飯田孝三

泥付きの一族貰ふ落花生

みち

郊外散策の径すがら、折から収穫作業の落花生畠に出る。「一株おもちになりますか」「あら、嬉しい、有り難うございます」。早速、泥付き、実が鈴生りを一株いただく。「泥付き」が目玉。その場の情景が、言葉のやりとりを交えて、居合わせたように見えてくる。晴れやかにリズムが弾み、辺りの明るい空気を運んでくる。「貰ふ」で、半拍、その間がいのち。「貰ふ」は終止、連体同形だが、ここは終止形。

潮風の堂に吹き込む日蓮忌

高志

日蓮上人は安房小湊に漁師の子として生れた鎌倉時代の僧。同地鯛の浦、誕生寺における囁目だろう。内外に難題をかかえる現在の世相は、上人の時代に通う。あたかも日蓮忌、上人の波乱の生涯に思いを馳せるのである。「吹き込む」は臨場の述懐。故山清澄寺に帰つた日蓮が、

波うち寄せる海に向つて、「南無妙法蓮華經」の御題目を唱えるのが聞こえる。

病院の待ち時間など白き秋

陽一

病院の診療待ち時間はどこも長い。その間、受診の本人はもとより付添いの家族もあてどない不安を募らせる。「白き秋」は（五行で白を秋に配する）白秋を借り、診察を待つ間の覚束ない心裡を表象する。助詞「など」と相まって、こころの空白がひろがる。「など」は不特定、複数、漠たる複合感情の謂いである。蓋し「など」が句の臍。

秋暑し駅のあちこち鳩の糞

多美子

a 音・i 音を重ねる上中のリズムは、いかにも「秋暑し」。坐、軟調「ハトノフン」で、ふつと一服する途端に、点々する鳩の糞の斑が目に入る。韻律、印象が交響し、巧まぬ俳諧が弾んで面白い。口誦三遍、感興いよいよ高まつて愉快ではないか。（出句一覽掲載順）

一句鑑賞▼（31号分）

武者昭七

名月やおん目の裏うしる明るけれ

孝三

俳句自身は自分を語らないから一読すらりと入つてくるものもあるけれど、一度自分の頭で読み解き再構成してみないと飲み込めないものもある。従兄弟の孝三君のなどはどちらかと言えば後者に近い。知性と諧謔が勝つ

ている感じである。ときどき会つては談俳句に及ぶ時など説明を受けて初めてハハンと納得できる場合もある。（説明しなくてはならぬ句などダメだと彼はいうものの・・・）時には、僕の勝手な解釈なんかでも温厚な彼は（頑固に自説をゆずらぬこともあるけれど）笑つて許してくれる。

さて、この句だが、これも「筋縄ではいかぬ」。「おん目の裏」にまず足をとられる。「おん目」で思い出すのは芭蕉の名句「若葉しておん目の雫ぬぐはばや」である。そうなると僕の中ではこの句の「おん目」は名月の唐招提寺とその堂内に静かに目を閉じて端座しておられる鑑真和尚の尊像ということになる。普通に考えれば目の後ろは「後頭部」だろうがそれでは意味をなすまい。となると尊像の後ろの襖か障壁画だろう。障壁画ならそこには東山魁夷描くところの和尚が越えてこられた万里の波濤が踊つてはいるはずだ。名月に映える波濤こそは尊像の背負う大いなる光背だ。名月の差し込む堂内、波音響かせる襖を背にしてめしいの目を月光にむける名僧。そこになにが映つてはいるか。というのが僕の感慨なのだけれど。

満月ノ影踏シマセウツモウ一度

孝三

旧かなづかいとカタカナをわざわざ選びとつた神経のこまやかさが孝三君の面目である。この句、表記だけの

問題ではない。時代と、そこに生きた今は亡き「はらから」たちに對する限りない追慕と愛惜と共感がこめられている。それがこんな表記をえらびとらせたのである。家族そろつて月の光あびて影踏み（なんという優雅な遊びだつたろう）に興じたあの頃。それはもう来ない。さあ、みんな、もう一度影踏みしましよ。昔が還つてくるかもヨ。 13・09・25

ハガキ句三十三報（08/1/20）

ささやかな夢を詰め込み福袋
淑氣満つ庭木の瘤の小さきも
電飾をきのう外して今朝の松
元旦の潮容れたり隅田川
鳥籠に雀来てをるお正月
年賀状来る人来ざるひと思ふ
初明り一人暮しに馴れもして
年の果て臥せば峙つ転居の荷
富士山の雪発光体の光
白鳥か鶴か初日に染まりゆく

妙子 始子 奉宣 孝三 喜々
美清流 裕子 ひろし 喜々
多佳子 圓子

はがき句報三十三号管見)

飯田孝三

破魔弓の袋に納め切らざるも

高志

うまい。誰もが覚えある、四角い紙袋に破魔弓を入れ携えたときの、あの、（ちぐはぐ）。破魔弓の丈が不似合い。何やら、現代社会の不安に通うではないか。「も」に万感。身近な一瞬を捉え、巧まず、深淵かつ空隙を窺がわせる。「破魔弓」が絶対。一〇〇八年版のそれである。

初鶏の片側の眼で見られたり

敏子

ぎよつ。「片側」が凄い。鶏の目は貌の側面にある。鶏が片方の眼で見て不思議はない筈だが、驚いた。眼だけがある。「たり」が万全。「初鶏」の他では否。この句も、現代の諧謔と不安が絹い交ぜ。奥が深い。「蛇逃げて我を見し眼の草に残る」（虚子）より、高格。抜けている。「破魔弓」も、「初鶏」も季語が字句を動かし、「物」に息を吹き込む。

新玉の喜寿へ一步をふみだせり

三穂

初春の光りのように生きたしと

たか子

破魔弓の袋に納め切らざるも

和志

初鶏の片側の眼で見られたり

敏子

年賀状來る人來ざるひと思ふ

美清流

とうに七十歳を過ぎ、つくづく同感する。「來ざるひと」が「贍」だ。過ぎ來し歳月が嵩む。重い。この句も、又、季語が面白。

鳥籠に雀來てをるお正月

喜々

雀の姿が見え、鳴き声が聞こえる。「をる」の手柄だ。ここで切れる。母音〇とIの繰り返しも、又、快。お正月である。

電飾をきのう外して今朝の松

奉宣

ほつとした。「～外して」で切れる。街の木々たちよ、お疲れさま。韻踏む母音〇のリズムが滑らかなのも、好い。

淑氣満つ庭木の瘤の小さきも

始子

庭木の「瘤」のフオカスがいい。「小さき」も又、弾む調べもめでたい。畳みこんだ「き」のせいである。ほかの各句、新年のめでたさや、それぞれの生活の句いが伝わり、さすが手練。ただ、敢えて申せば、ご尤も。その筈、賀詞交換の句。新年の句は難しい。妄言多謝。

(平20・02・16)

お便り広場 (到着順、敬称略)

「白金葭」九月号拝受いたしました。八月はあまりの暑さに外出を控えたため、九月十月は友人・知人・親戚

との対応多く医者通いも含めると、こんなにも驚くばかりです。とにかく毎日忙しく過ごしています。近頃は古本を買つたとたん、またバカなことをしたなあの反省しきりです。その点、白金葭を頂くとまだまだ勉強をと思ひます。(現実は何もしませんが)。一時身のひきしまる思ひがします。毎月ありがとうございます。

拝啓 昨日9／27(金)にはTe1有難うございました。(9.28 小山陽也)

とうとう欠席しました。戸手高校同窓会も楽しみにしておりましたのに。夏バテです。昨日は医者に行き薬を貰えもらつてよくなり、明日9／30(月)は胃腸の検査です。油断したり過信したりですが、七十四歳の老齢を忘れてはいけないようです。下したりもどしたりで、もうこの世もおしまいか、と一時は悲観。せめて八十才の平均寿命まではとついつい願い祈りたくなりました。右感謝して一筆まで。貴台もご自愛の上ご健筆の程を祈念申し上げます。

敬具

(H. 25. 2013. 9 / 29 (日) 河村博旨)

先日は東松山吟行のご案内を有難うございました。よろこんで参加させて頂きます。吉見百穴の近くに「無量寺」という真言宗の寺があるので、そこに埋めてあつた骨が、以前「赤沢宿」で貴兄から撮つていただいた母のものです。ですから愚生には思い入れのある所です。

案内して下さる「仲本興正」さんは地元土着の方でしょ
うか？楽しみにしています。右お礼まで。

(H. 25. 10. 1 佐藤宏之助)

拝復 おハガキを有難く拝受。近い内にまた拝眉して
俳句のことや戸手高校のことなどについて談笑できれば
と念じています。十月二日（水）に入院検査に入りました
。十月十一日（金）に手術の泊。成功してあと五年
く十年の寿命が精一杯かと考へて覚悟しています。

（闘病日記窓の外にはコスマスの花

由紀夫）

と下手な句を書きたりします。闘病日記を記入する
チヤンスを神様に与えられた一面もあると感謝して病室
で毎日日記を記入しております。右感謝して一筆まで。
ご健筆を祈り『白金葭』句誌の益々の発展を祈念申し上
げます。

敬白

(H. 25. 10 / 8 (火) 河村博旨)

吉見百穴吟行句会報、本日頂戴いたしました。あいか
わらずの早業、恐れ入りました。記録はかなり詳細で、
当日の記憶がまざまざと甦ってきました。お疲れ様でし
た。ありがとうございました。みち様にもよろしく。

次回の11月吟行、参加させていただきます。よろしく
お願ひいたします。ところで、貴会の年会費はおいくら
でしようか？毎月の句会は遠方のため参加できませんが、
吟行にはできるだけ参加させていただくつもりです。せ

めて資料代だけでもと思つておりますので、ご教示いた
だければ幸いです。とりあえずお礼まで。

(H. 25. 10. 17 仲本興正)

（お礼）先日の十月例会では、お世話になりました。
会場の雰囲気も変つて、又、楽しいひと時でした。吉見
百穴吟行に出られなかつただけに、一層、そう感じまし
た。いつもの気ままな妄言を後で恥じ入っています。つ
くづく丹精された金胡麻と銀杏を、カミさんがえらく感
激しました。お礼申し上げます。家族の誕生日に赤飯を
炊くのがわが家のしきたりですが（カミさんが小生の母
の習慣を引きつぎました）、ひねた息子の誕生日を繰り上
げ、早速に赤飯を炊き、いただいた胡麻を炒りました。
弾けるふくよかな香りに、過ぎし家族の団欒の場が蘇り
ました。

金の胡麻かけて赤飯芳しき
銀杏の翡翠くるめる素焼殻

ただならぬ異常気象が続き、秋冷がつのります。ご夫
妻ともども御身大切に、ご清吟されますようお念じもう
しあげます。草々 (平25. 10. 20 飯田孝三)

百穴吟行句会報を本日受け取りました。吟行録はな
なか優れもので感服しました。また機会があればご一緒
したいと思います。よろしくお願ひいたします。

(H. 25. 10. 21 林半寿)

受贈誌
(十月号)

法善寺横町奥の鱈料理(飛行雲68号)
二階まで二重三重柿暖簾(彩113号)
裏富士のしろがね光り柿を剥く(リ)
のうせんの蓬花掃かぬがよろしかり(あすか10月号) 山尾かづひろ

駿河岳水
平野ひろし
"

俳窓評論纂

*俳句総合誌の富士山特集号に、平野ひろし主宰の文章と「彩」の富士山の句が載った。「私の富士山」という題のひろし先生の文章を少し紹介する。

深田久弥は『日本百名山』の冒頭に書いてあるとおり、富士山の本はいくらでもあり、語られ、歌われ、描かれた山は世界にないだろう。ひろし先生は幸運にも富士山の麓を終の棲家とした。家中から首を右に曲げるだけで富士山と対面できる。だが是非皆様にご覧頂きたいのは冬の満月下の富士山だ。先師の山口誓子は二回登頂しているが、その記念に富士山剣が峰の日本最高所に句碑が建つていて、下界まで断崖富士の壁に立つ。

誓子

下界から仰ぐ富士山は優雅だが、お頂上に立つて火口を見、さらに大沢崩れを覗くと足が竦み膝ががくがくするほどの断崖絶壁だ。片岡球子画伯は六十歳を過ぎてか

ら富士山に挑戦したが、描くたびに跳ね返されると言っていた。芭蕉さえ東海道を六度往復しているが、生涯の名句がないのだから富士山の俳句は難しい。富士山は単に有るのではなく、存在していることを深く認識したい。』

去年今年不二天界の白芙蓉
夏見舞富士山山頂より来る

校庭に迫る雪富士始業式

平野ひろし
宮川喜代子
景山公子

・私の家からも南西に遠富士が見える。遠富士と言えども、かなり大きく見える。東京の空越しに見える。秋から冬、そして五月頃までよく晴れた日には私の寝室からもよく見える。序にスカイツリーも同じ方角に見える。「初富士のかなしきまでに遠きかな」(青邨)の富士山は何百キメートルも離れているのであろう。私のところは130キメートルの距離である。朝の富士山を眺めるだけで心が晴れ晴れする。富士を崇拜する人々の心ばえを共有している気持ちでそれだけでも元気ができる。(編集子)

*青江由紀夫さんから、同人誌「櫻」第30号が送られてきた。年一回の発行を続けて30号に「夢」というテーマで執筆した全員のエッセイを載せている。バックナンバーも掲載されている。青江由紀夫さんは、後世に残る著作を書くことなど多彩な夢を書いている。また、他の同人誌に載せていく「銀次郎の日記」はこの誌にも投稿さ

れている。—大きな幸福よりも些細な快感や便利—という副題がついている。生活の些事を細々とかかれた所、庄野潤三さんのドキュメンタリーと似通つている。

「フランクリン自伝」の四回目の読書を今年四月二日におこなつた。4137冊目。これを十年あまりで読んだとか。月33冊ペース。乱読多読は由紀夫さんの得意とするところ。フランクリンをせめて中学、高校時代に読んでおけば何かで成功したであろうとに、感慨を書かれてある。雅俗混交の生活をされておられる青江由紀夫さん、本誌同人の松村幸一さん、共に読書人である。分野が少し違うようであるが。本誌のお便り広場に載せたハガキが現在の著者である。

*「あすか」に連載中の山尾かづひろさんの**大江戸少女**

日記は、源氏物語の「少女」の巻に及んでいて、私の影響かもしだせませんが、益々快調に江戸時代の町人に語らせている。春夏秋冬に擬せられた六条院のこと、そこに住む紫の上、秋好中宮、花散里、明石の君のことを説明すれば大変長くなる。今月は、紫の上について少しばかり書いてある。芭蕉は季吟の湖月抄から源氏物語を読んでいるが、どうかかづひろさんもこの調子で源氏を紹介していって下さい。ライフワークになりますよ。

*陽一さんから、「ハポン支倉常長俳句賞入選句集」を貰つた。これは支倉常長が遣欧使節として月の浦を出航し

てから今年で四百年になり、日本・スペインの交流年を祝う一環として行われた俳句コンクールの句集である。

二年前の東日本大震災と津波の犠牲者に対する追悼行事の一つとして生れたとある。A4版の艶ありファイン紙を使つた94ページの入選句集である。表紙には、常長の孫の支倉常隆氏とスペインのハポンである少女達と映つた写真が掲載されている。ドイツのベルリンにある鷗外記念館では日本の会員の方と向うの鷗外研究家が仲良く写つてある写真を見たことがあるが、こちらはスペインでのことである。今年六月にスペイン・アルバセテで行われた俳句セミナーには、陽一さんの結社の高野ムツオ氏が講演されたとか。陽一さんの入選句は

屋根灼けてハポンの街の鶴

増田陽一

というもので、ルクエおじや賞の一席に当つている。鶴はカンと読むのである。コウノトリのことで、芭蕉にも鶴を詠んだ句があつたと記憶する。有馬朗人選の秀逸に、対馬康子選の秀逸にもとらされている。中学・高校の部も募集され、その俳句大賞は

稻妻やサグラダファミリア未だ成らず

矢ヶ崎研治

と言う句である。サグラダファミリアとは、例の有名なアントニ・ガウディの教会建築である。世界遺産になつていて、未だ建築中である。なにしろ設計図は無く、書いていると切が無いので省略する。バロセロナといつ

たら皆ここに行くゞ時世になつた。有馬朗人の特選句でもある。

伊達政宗歴史館の招待状も一枚入れてありました。一年間有効とありますので、松島へお出かけの節は申し出下さい。みちのくで出会う偉人たちとして、野口英世、土井晩翠、斎藤茂吉、宮沢賢治、棟方志功、白瀬壇のぶが併設されている。

こだま（俳誌交換主宰選句）

飛行雲夏号（68号）駿河岳水主宰抽出

法務局花壇一坪チユーリップ（26号）

彩十一月（113号）平野ひろし主宰抽出

そこここに黄金色なる甜瓜（29号）

エンジンの唸る中に終戦日（30号）

青木啓泰

光成高志

〃

武者昭七

草千里浜

われ嘗てこの国を旅せし」とあり

味爽あけがたのこの山上に われ嘗て立ちしことあり

肥の国の大阿蘇の山

冒頭まず作者がかつてこの国を旅したことのあること、それが肥の国の大阿蘇の山であることをいう。「われ嘗て」と二度の繰り返しが、あとの「今日もかも思い出の藍にかけろふ」の詩句と対応し、「嘗て」と「そのかみの

日」「今日も」の並置に過去と現在の対照が鮮明であり、早くもこの詩全編を貫く「流れ去る時間意識」のキーワードとなつてゐる。

ついで作者の目はあたりの「嘗て」の日の変らぬ風景をとらえる。

裾野には青艸しげり
尾上には煙なびかふ 山の姿は
そのかみの日にもかはらず

環たまきなす外輪山そとがきやま
今日もかも
思い出の藍にかけろふ
うつつなき眺めなるかな

「うつつなき眺め」とは現実とは思えぬ眺めのこと。いま目の前に開ける雄大な情景であると同時に作者の思い出の中に生きる風景である。それはなつかしい「藍」にかけつてゐる。

「藍」や「青」は作者にとつて遠くに思い出を誘う色であつたことはすでにみてきた。現在の時間に過去の時間が重なり、作者の目にうつるのは現在と懐かしい過去の二重写しの風景である。

しかあれ
若き日のわれの希望のぞみと
二十年はたとせの月日と 友と

われをおきて いづちゆきけむ

そのかみの思われ人と

ゆく春のこの曇り日や

大阿蘇の姿は変らずとも二十年の歳月は確実に作者から若き日に抱いた希望と、友と、思いを寄せたひととを奪つていった。

「しかあれ」の逆接語を境にいまは失われてしまつた青春の形見の数々を作者はうたいあげ、「われをおきて いづちゆきけむ」とひとり取り残された老残の身の痛恨と孤独をなげく。目の前の存在が失われたものの非在を痛切に浮びあがらせるのだ。

阿蘇の大自然という時の流れに耐えてあるものと、人の世のいとなみという流れとどまらぬものとのどうしようもない落差をそれは作者に突きつける。

われひとり齢よいかたむき

はるばると旅をまた来つ

杖により四方よもをし眺む

肥の国の大阿蘇の山

駒あそぶ高原の牧

名もかなし艸千里浜くせんりはま

終末部はとし経た孤独者の再訪を確めたあと静かに全編を閉じる。「嘗て」この風景を眼前にした若者は今はひとり年老い、杖に身を託して四方の景色に眺め入るばか

り。暮れていく春の高原の眺めは「そのかみの日」に変らず、その名も悲しみをさそう。

いまも僕らのしばしば試みる曾遊の地の再訪の旅はたとえそれが流れ去つた時間の確認という甘いセンチメンタリズムに終ろうと、古来多くの旅人たちの味わいづけてきた悲しみの確認であり、この国の風土に深く根差した万葉以来のうたの伝統につながるかなしみであろう。三好のたびのうたの多くもその中にある。

(2013・08・20)

芭蕉のかるみ以後 (30)

光成高志

芭蕉の軽みは芭蕉晩年の芸境であるが、その萌芽は江戸に下る年の「貝おほひ」にあることを述べた。談林風のとつびな型破りをやつて「貝おほひ」という処女出版に賭けたのである。宗房が下江して翌年の延宝二年頃に江戸で出版され、再版が出た証がある。きっと江戸の人には面白かったのだ。宗房のそれまでの学問を突き抜けて、洒落な青年宗房の個性から生み出されたものだ。学問を己が物として自由に通俗に生かした点で、宗房の無意識の軽みをなした句集と見ていいと思う。江戸に下つてから直ぐに俳諧で生活できたわけではなく、京で知りあつた日本橋の小沢太郎兵衛宅に居候して書記役をして書計を立てていたが、数年後には、神田上水の浚渫請負人

としてかなり大仕事が出来るまで世間の信用を得ていた。

俳諧の方も北村季吟から連歌俳諧の秘伝書「埋木」の伝

授を受け、俳諧の座に出て俳諧師と面識をもつようにな

つていった。延宝三年は下江後四年目である。江戸に來

た西山宗因（一六〇五—一六八二）の歓迎百韻俳諧の一

座に参加、初めて桃青と名のつた。これは李白の号を真

似て、桃青としたのである。李白は、すももが白いとい

う意味であり、桃青は、母方の桃地姓から桃を使い、桃

が青いとしたのである。宗房の号は藤堂家に返上して、

江戸にて俳諧師として世に立とうとする意志の表れであ

る。又、この頃、撫付髪をしていたのもそれである。芭

蕉の俳諧は初め貞門であつたが、段々談林風になり、こ

の時は時代の先端を行く宗因の談林俳諧になじんでいる。

後の去来抄には「上に宗因なくんば、我々が俳諧今以つ

て貞徳が涎をねぶるべし。宗因はこの道の中興開山なり」と語つていて。芭蕉はこの百韻の中で付句七句が選ばれていている。

いと涼しき大徳成けり法の水

軒端を宗と因む蓮池

しよう畫

宗因

反橋のけしきに扇ひらき来て

石壇よりも夕日こぼるゝ

（中略）

座頭もまよふ恋路なるらし

宗因

そひへたりおもひ積て加茂の山

（中略）

時を得たり法印法橋其外も

新筆なれどあたひいくばく

以下略。この年延宝三年には既に腹も定まり、名も知

られ、桃青を慕つた宝井基角十四歳、嵐蘭二十八歳、杉

風、嵐雪それぞれ入門しており、煩悶した気持ちをぶつ

切つて、終に無能無芸にしてただ此一筋につながる生活

になった。留まることなき新風への歩みが始まったので

ある。行き着く先は軽みである。

詩

鎌倉断章

I

潮の香りを湛えて
砂に埋まつた河口
滑川の川底は浅い

II

ヤトの奥はもう秋
隠れ里の水は冷たい

III

彼岸花の咲く崖つぶち

武者昭七

桃青
信章

ヤグラの奥まで
薄ら日が差し込んでいる

で、非常に美しく想像される。
秋の航島々溺れゆく」とし

IV 古い街道の入り口

地蔵さんとサエの神と
二体並んでいる

V

すたれた街道に
萩の花が散つて石仏の
頭を飾つた

注

滑川は鎌倉市内の東部を流れて油比ヶ浜に注ぐ川

ヤトは山間の低地をいう

隠れ里は佐助が谷の奥の佐助稻荷一帯をいう

ヤグラは掘りくぼめた方形の墓地。覚園寺裏百八ヤグラが有名

増田陽一「ファーブルの机」鑑賞

光成高志（05/6/1）

水涸るるタイ国境の蝶吹雪

場所を明示し、川に水がない。涸れているのに、蝶が

花吹雪のように動いてきたのを目の当たりにしての感動だ。

蝶吹雪という言葉は、花吹雪に回り道をして想像するの

泡盛や木影を蝶のまろび出づ

にしても採集の蝶は転げるように出でくる。追いかける事はない。大きいかな自然と泡盛を口に含みながら感じてゐる。仲間と談笑の中にあるようである。

早春の唇に当てたる泡盛

泡盛の香と感触は早春のものだ。陽射しの明るさも自ずと伝わつてくる。

*以前頂いた陽一さんの句集を読み、鑑賞文を書こうとして今だ完成していない。今回の陽一さんのハポンの句を読んで、「ファーブルの机」鑑賞を未完のままではいけないと想い、今月から編集調整版としてではあるが、掲載し、鑑賞を続けます。それだけ読み応えのある句集であつて、決して饅頭本ではありません。

我孫子日記

9/20例会。9/25SOA。9/26久寺家中。9

28法曹会館。日比谷公園。9／29結縁寺。10／
2SOA。10／6北千住。10／7*吉見百穴吟行句
会。10／9SOA。10／10³*久寺家中。10／11
12*池上本門寺→鎌倉→池上本門寺。10／18例会。

*物語えは玄室秋のこたまかな

玄室を出れば背高泥立草

百穴の頂上ありて木の実落

露けしや地蔵百体室の中

秋寂びの吉見百穴ぽつかりと

百穴の入口守るいぼむしり

玄室に漂ひゐたり草の絮

2* 阿波踊りに紛る万灯練供養

堂日抄一ノ本
火絵文昌子元氣主

秋の水靈狹鬼の闇は音
狂鳥の三日経宿二日経の

笛囃や佐助稻荷に奥社あり

袂石手玉石とや落葉降る

3
*黍嵐男の子女の子の名は瑞希

編集後記

今月の兼題を御命講にしたので、一念發起して池上本門寺のお会式を見物した。三日間行われるので、その一日鎌倉を歩くことにした。この夏に西側大仏ハイキングコースを歩いた時、佐助稻荷のすぐ上を通つたのである

が、そこに下りなかつた悔いが残つていたところ、武者
昭七さんからわわたしの鎌倉そぞろ歩きーというエッセ
イを頂いた。渡りに船と、これを片手に、由比ヶ浜から
佐助稻荷への道を歩いた。そこのボランティアの方から
聞いた御靈神社（これも浅草で昭七さんから聞いた覚えがあ
る）へ取つて返してお参りして、池上にまた取つて返し
た。お会式のことはさておくとして、鎌倉である。昭七
さんから鎌倉断章でふ詩を頂いた。昭七さんは鎌倉時代
以前の隠れ里に興味をお持ちとか。化粧坂の一文も貫つ
ているので、いつかまた歩いて味わいたい。

白金葭十月号
(第32号) 発行所
我孫子市南新木2-14
編集・発行人 光成高志 TEL・FAX (047-871-0688)
表紙の題字 加納綾女 写真 白金葭